

## 社会主義，20世紀の到達点から21世紀の構想へ

——藤岡惇論文「ソ連型社会とは何であったのか？ その本質は『国家産業主義』だった  
——大地・生産手段への高次回帰，自由時間の拡大を指標に考える——」を手がかりに——

後藤宣代

### 目次

はじめに——問題の所在と限定——

I 藤岡論文の基本構成

II 20世紀ソヴィエト社会主義建設構想——レーニン構想と基礎過程——

III ロシア・アヴァンギャルドによる芸術革命——「生活の芸術化」の20世紀・ソヴィエト的展開——

IV アメリカにおける展開——ニューヨーク近代美術館設立からエコトピアまで——

V オキュパイ・ウォールストリート運動が提起する生活革命——21世紀展開のはじまり——

おわりに

### はじめに——問題の所在と限定——

まもなく、あの「世界を震撼させた」ロシア革命から100年を迎える。ここ数年、とりわけ2008年の世界経済危機以降、資本主義にとってかわる未来社会論として、世界各地で社会主義・共産主義再考が試みられている。その際、20世紀に現存したソヴィエト社会主義とはどのようなものであったか、その性格規定も改めて試みられている。本稿で取り上げようとする藤岡惇の論文もこのような歴史的脈絡のなかで報告され、論文となってきたものである。2010年9月、基礎経済科学研究所第33回研究大会において「ソ連型社会の崩壊20周年を考える分科会」が開催された。その報告が所収されているのが雑誌『経済科学通信』（基礎経済科学研究所発行，No. 125号，2011年4月）である。『経済科学通信』編集局は、「ソ連型社会とは何であったのか—未来社会への展望を拓く—」という特集の意図を次のように述べている。以下、引用しておこう。

「崩壊後20年の間に莫大な資料が公開された。ソ連型社会とは何であったのかをめぐる過去の共同幻想をぬぐいさり、客観的な認識を深める上で好都合な環境が整ってきた。……本特集で解明したいテーマはつぎのとおりである。

- 1) ソ連型社会主義の本質をめぐっては、『国家資本主義』、『国家社会主義』、『国家産業主義』などなど、多様な見解が出されているが、本質をどのように捉えるのが適切なのか。
- 2) 世界市場への統合を契機に、中国やベトナムの社会体制の質も大きく変わりつつあるが、これら諸国の現状をどのように認識したらよいのか。
- 3) ソ連崩壊の教訓をふまえるだけでなく、新自由主義経済の破綻、あるいは世界社会フォーラムの運動のもりあがりといった、この間の動きもふまえたばあい、あるべき『未来

社会』論をどのように構想したらよいか。

ソ連型社会の崩壊の歴史から必要かつ十分な教訓を引き出すとともに、客観的で、ドグマからは自由な『未来社会』像を構想していくために、本特集が有益な貢献を行うことを期待したい<sup>1)</sup>。

みられるように、なによりも「未来社会」論の構想のために意図された特集であり、その特集論文の一つとして所収されたものが、藤岡論文なのである。

ところで、まったく同じような意図で、社会主義・共産主義の理念を復権させようという試みが欧米でも始まっている。ここでは、その代表的なものを挙げておこう。2009年3月、ロンドンのパークベック大学人文学研究所で「共産主義の理念」と題されたコンファレンスが開催される。そしてこのコンファレンスの報告を所収した『共産主義の理念』が出版された。編者2人（コスタス・ドゥズィナス、スラヴォイ・ジジェク）による「序」において、その意図が明らかにされる。以下、少し長いですが、欧米の思想界を理解するうえで参考になるので引用してみよう。

「左派の長い夜は明けようとしている。敗北、断罪と失意の80年代と90年代。勝ち誇る『歴史の終焉』論。アメリカの一極的覇権。こうしたものすべてが、急速に旧聞と化しつつある。年にして2000年。ヨーロッパでは、ハーバーマスとベックが欧州連合とその共通通貨ユーロに現<sup>うつつ</sup>を抜かしていた。それが未来の人類の規範<sup>モデル</sup>となるといった預言を垂れ流して。今日、現実はなんと変わってしまったことだろう！もはや欧州連合は模範ではない。欧州連合は、『財政規律』を取り戻すというお題目のもと、空前の緊縮政策や失業と貧困を労働者に<sup>お</sup>押しつける、狂信的な右派政権と意欲を失った社民からなる機能不全に陥った一組織にすぎない。……

新世紀2度目の10年の冒頭で、冷戦後の独善は終わった。経済危機が極まり、全般的な政治危機を惹き起こしたが、それは政治システムの正統性を脅かし、人びとは資本主義的イデオロギーから距離をとるようになった。西欧では、新たな敵対関係と闘争が、大きな人間集団を経済活動や政治参加から組織的に排除し、エコロジー危機の恐怖に曝していた福祉国家の言い訳を乗り越えて、発展している。2010年代の冒頭、とりわけギリシアやフランス、インドやタイで新たな戦闘性が突出し、それは広範な人びとを、何よりも決定的には、若者たちを、抵抗・叛乱・解放へ導き入れた。1989年が世界新秩序のとば口だったとすれば、2001年はその終焉を告げたのであり、2008年における信用システムの崩壊は成熟しきった歴史への回帰の始まりを<sup>しるし</sup>標しづけた。それがわれわれにとっての『世界新秩序』だったとすれば、それは世界がこれまで経験したなかでも最短の道取りだった。

歴史の回帰は急進的な理念や政治に対する新たな関心をもたらした。21世紀における左派は、ソ連崩壊がもたらした内省・悔悟・艱難をついに過去のものとする<sup>つる</sup>ことができる。『現実の存在している社会主義』と<sup>つる</sup>連んできた左派は消え去ったか、あるいは歴史の骨董品<sup>2)</sup>と化した。」

このように、今、世界各地で社会主義・共産主義の理念を再考する試みが、資本主義の危機のなかで進んでいるのである。また藤岡は、2011年9月、立教大学で開催された経済理論学会第59回大会の「社会主義と労働」分科会においても、「ソ連型社会とは何であったのか—大地・生産手段への高次回帰、自由時間の拡大を指標に考える—」と題する報告を行っている。この大会の共通論題のテーマは「グローバリゼーション下の経済金融危機と国家」であり、「資本主義の危機と未来社会」は、いまやアカデミズムにおいても世界的な研究テーマというべきであろう。本稿では、藤岡論文を手がかりに、このテーマについて考えてみることにする。

## I 藤岡論文の基本構成

藤岡は、マルクスとエンゲルスの未来社会論の核心を、都市と農村との高次融合、それによる社会構成員の全面発達に置く。藤岡論文では次のように規定される。

「(マルクスとエンゲルスの一引用者) 未来社会の根本条件というのは、人間が生産手段と再結合するだけに留まらず、大地・自然の懐に人間が回帰することにあるべきだという見解を彼らは堅持していた。じじつマルクスは『資本論』第1巻のなかで、こう書いている。『すべての……分業の基礎は、都市と農村との分離である。社会の全経済史はこの対立の運動に要約される……』(邦訳全集版, 23巻, 462頁)。『しかし、同時にまた、この[資本主義的]生産様式は、ひとつの新しい、より高い結合のための、すなわち農業と工業との対立的につくりあげられた姿を基礎として両者を結合するための、物質的諸前提をもつくりだす。……資本主義的生産様式は都市労働者の肉体的健康をも農村労働者の精神生活をも破壊する。しかし、同時にそれは、……人間の十分な発展に適合する形態で、[肉体的健康と精神的健康の両立を]体系的に確立する』(同上, 656<sup>3)</sup>頁)。

ここで理論上の論点として、「両者(工業と農業—引用者)を結合するための、物質的諸前提」という規定が、農業も工業と同じように「機械と大工業」を「前提」とする資本制的生産様式ということになるのかどうか問われてくる。藤岡は、この理論的な一大論点については言及していない。

藤岡は、マルクスのいう都市と農村との高い結合、あるいは農業と工業との結合という枠組から、20世紀に現存したソヴィエト社会主義共和国連邦の性格規定を行って行く。まず「国家社会主義」と規定する見地を退ける。その論理は、こうである。

『『資本主義・帝国主義からの絶縁』をめざす社会革命が、マルクス主義者の主導のもとで97年前にロシアの地で起こった。『文明は、われわれに大都市という遺産を残した。……大都市はとりのぞかれなければならないし、またとりのぞかれるであろう』』ということ、マルクスは未来社会創造の最大のポイントにしていたのだが、『とりのぞくべき大都市』がまだ初歩的にしか形成されておらず、逆に分業と産業化の徹底、大都市の形成のほうこそが歴史的進歩=生産力上昇の課題だという発展段階にあったロシアで『早すぎる革命』が起こってしまったわけだ。それはなぜか。『全能の舞台監督が第1次世界大戦』だったからだ<sup>4)</sup>』

つまり生産力の未成熟、都市プロレタリアートの未成熟、大都市そのものが未形成で、その結果、社会主義とは「逆向き」の方向、つまり「分業・専門化・産業化・都市化文明の創出の方向に歩むようになった」とするのである。この「分業・専門化・産業化・都市化」という事態について、藤岡は、「社会主義」と規定するには、方向が「逆向き」だということを根拠にして「どだい無理があった」とするのである。そして、社会主義とは「逆向き」ということで、これを「資本の原始的蓄積」とする<sup>5)</sup>のである。さらにスターリンが「生産力・軍事力の増強をしゃにむに追及」したために、上からの国家による強力的な形をとることになったことも指摘されている。こうした事態について、「資本の本源的蓄積」という規定から論理を一貫させれば、資本主義に

帰結することになるのであるが、藤岡はそうした資本主義という体制概念を使用せず（但し、「国家資本主義」と規定するには「戸惑い」があると吐露している）、「国家産業主義」概念規定を導き出してくる。

藤岡によれば、こうした「国家産業主義」は、20世紀の先進資本主義国も同様に、「経済領域の肥大化（産業化・大都市化）」、すなわち「生産力の過小でなく、過剰に苦しめられる時代」という現代的問題を抱えることとなった。ここから21世紀の現代における未来社会の構想は、「大地（自然）への高次回帰、自由時間の拡大、自由時間のなかで生活の芸術化」ということになる。藤岡は、全体像として「社会・文化・エコロジーとのバランスをとれる社会の創造」を打ち出すのである。

こうした20世紀の到達点・問題点から21世紀の未来社会を構想していく点において、「文化・エコロジー」を強調していくという藤岡の論点提起は、本稿においても大いに共有するところで、これは後述する。

## II 20世紀ソヴィエト社会主義建設構想——レーニン構想と基礎過程——

こうした藤岡の構想の妥当性を吟味するためにも、出発点である「ソ連型社会」とは何であるのかという議論をきちんと整理しておく必要がある。そこで、あらためて社会主義建設者たちの見解に立ち返ってみよう。やはり最初に取り上げる人物はレーニンをおいて他はいないであろう。

ではレーニンの見解のなかから、何を取り上げて吟味すべきなのか。ロシア革命と社会主義建設の到達点を振り返っている最晩年、1922年に書かれた「政論家の覚え書—高い山へのぼることについて、意気消沈の害について、商業の利益について、メンシェヴィキにたいする態度等々について—」が最適である。ちなみに、このレーニンの文章は、先に紹介した『共産主義の理念』の総括と展望において、スラヴォイ・ジジェクも取り上げている。また彼は「リピーティング・レーニン」を強調して、たびたび自著のなかでも引用している。<sup>6)</sup>

革命を山にのぼることに喩えながら、登頂を断念し、下ること、そしてもう一度登りなおすことの意義について、次のように述べている。

「非常に高く、けわしい、まだきわめたことのない山にのぼっている人を想像してみよう。彼が前代未聞の困難と危険を克服し、先人よりもはるかに高くのぼることに成功したが、しかしまだ頂上には達しなかったものとしよう。彼は、えらんだ方向と道を前進することは、もう困難で危険なだけでなく、まったく不可能だという状態におかれた。彼は引きかえし、山をくだり、より長いとはいえ、とにかく頂上に行きつく見込みのあるような、別の道を探しとめなければならなくなった。仮想のわが旅行者がおかれた、世界でまだ見たこともない高みからおりこすることは、危険であり、困難である。おそらく、のぼるときより困難は大きくさえあるだろう。……

下のほうからただよってくるのは人の災難を喜ぶ声である。一部の連中は、人の災難をおおびらに喜び、はやしたて、いまに失敗するだろう、彼がそうなるのはあたりまえだ、早まったことをするな！ とわめきたてる。……

ロシアのプロレタリアートはその革命のなかで、1789年と1793年にくらべてはもちろんのこと、

1871年にくらべてさえ、非常に高いところのぼったのである。われわれがいったいなにを『成しとげた』か、なにを成しとげるにいたっていないかを、できるだけ冷静に、明瞭に、はっきりと自覚すべきである。そうすれば頭はすっきりとするであろうし、吐き気も、幻想も、意気消沈もおきないであろう。

われわれはブルジョア民主主義革命を、世界でまだ見られなかったほど『純粹に』『成しとげた』。これは最大の成果であり、どのような力も、これを取りもどすことはできないであろう。

われわれは革命的なやり方で、きわめて反動的な帝国主義戦争からの脱出を、成しとげた。これもまた、世界のどのような力も取りもどすことのできない成果であり、しかもこの成果は、資本主義が存続するかぎり、反動的な帝国主義的殺戮が近い将来に避けられないだけ、それだけ貴重である。……

われわれはソヴィエト型の国家をつくりだし、それによって新しい世界史的時代を、すなわちブルジョアジーの支配の時代にとってかわったプロレタリアートの政治的支配の時代を、開始した。これもまた、もう取りもどすことはできない。もっとも、ソヴィエト型の国家を『成しとげる』ことは、数カ国の労働者階級の実験的経験によってはじめて成功するであろう。

しかしわれわれは、社会主義経済の基礎工事さえ、成しとげていない。それはまだ、われわれを敵視する死にかけた資本主義の諸勢力が取りもどすかもしれない。このことをはっきりと自覚し、公然とみとめなければならない。……われわれはいまのところまだひとりぼっちであり、しかもこのおくれた、どの国よりも荒廃した国で、信じられないほど多くのことを成しとげたのである。そればかりではない。……どこで、いつ、成しとげていないものをどのようにやりなおすかを冷静に考慮することのできる冷静な頭脳を温存したのである。誤りなしに、後退なしに、成しとげていないものややりそこなったものを何度もやりなおすことなしに、社会主義経済の基礎を仕上げる（とくに、小農民の国で）といった世界史的『事業』を完成できると想像するような共産主義者は、たしかになっていない者とみなすべきであろう。幻想にも、意気消沈にも陥ることなく、からだの力と柔軟さを保持しながら、困難きわまる任務を取りあつかってふたたび『始めからやりなおす』ような共産主義者は、失敗しなかった（また、おそらく失敗しはしないであろう<sup>7)</sup>）。

1922年2月末に書かれたこの「覚え書（原語では感想・メモという意味もある）」は、21世紀のいまなお極めて示唆に富む。レーニンが、いまだ「社会主義経済の基礎工事」に至っていない「小農民国」が、「ひとりぼっち」であるにもかかわらず「多くのことを成しとげた」と述べているのである。では、「社会主義経済の基礎工事」とはなんであろうか。1924年のレーニン亡き後、1920年代半ばから開始される「工業化論争<sup>8)</sup>」という事態が端的に物語っている。ここでは「社会主義経済の基礎工事」を理解するために、当時の経済的基礎過程を一瞥していくこととする。

「社会主義経済の基礎工事」は、24年のレーニンの死後、周知の政治闘争を伴いながら進められた。第一次世界大戦とロシア革命を通じて世界史の表舞台に登場することとなったソヴィエト政権が、自立した国民経済の構想に取り組み始めるのは、前提としていた「社会主義の二つの片われ・二羽のひよこ」のうちのひとつ、すなわち「社会主義の経済的、生産的、社会=経済的諸条件<sup>9)</sup>」たるドイツ、そのドイツ革命の波が引いてしまい、内戦・干渉戦がようやく収まった1925年末に開かれた第14回党大会であった。

旧ロシア時代の疲弊した固定資本の基礎上に、流動資本投下によって稼働率を高めることで生産力復興を図ってきたが、いまやそれも陳腐化・老朽化するに至った。こうして固定資本の本格的更新・有機的構成高度化の必要性が生じた。それは、経済内部からの新規投資・建設にとどまらず、「社会主義の経済的、生産的、社会＝経済的諸条件」を欠いた、もう「一羽のひよこ」が、たった「ひとりぼっち」で、それを創り出すという事業に取り組むことになったことを意味した。党大会は、レーニン主導のネップ（新経済政策）期に採用してきた旧ロシア資本主義時代の再版ともいべき、穀物輸出・機械輸入依存の工業化方式を断ち切り、資本主義世界経済・農産物価格変動に影響されない、自立した経済建設を行うこと、そのために「機械と設備を輸入する国から、それらを輸出する国」を建設することになったのである。

そこで要請されてくる具体的な技術水準は、第一次世界大戦という総力戦によって動員され、新兵器（航空機、戦車、そして潜水艦）の軍事力として結実することにもなる、20世紀の生産力たる重化学工業であった。こうして第一次世界大戦を通じて生誕したソヴィエト政権は、まさにこの世界大戦で示された軍事力の基盤である重化学工業を、「ニコライとラスプーチンの国」に、「ひとちぼっち」で創り出していくことになったのである。

1926年の第15回党協議会は、「国の全経済のうえに、社会主義的大工業の経済的ヘゲモニーを強化することが、社会主義建設の成功にとって基本的前提条件」であると決議し、先進資本主義国の生産力水準に、短期間で追いつき追い越す条件は、あげて蓄積のテンポと固定資本拡大のテンポいかにかかっているとした。ここに、資本主義と同じ生産力水準の大工業といっても、「社会主義的大工業」という生産関係に関わる概念が提起されることとなった。では、「社会主義的」とはどのような内容なのか。そこで提起されてくるのが、市場という資本主義の生産関係に代わる、計画化という社会主義の生産関係に関わる概念である。

こうして計画化が具体的に提起されてくることになる。その計画化は、誰がどのように担うのか。計画化のテンポ確定の具体的な作業は、ゴエルロ（ロシア電化委員会）を継承・発展させた Gosplan（国家計画委員会）と最高国民経済会議が、計画達成目標数値・統制数値を作成するという形で担った。Gosplan 内部では、統制数字の作成をめぐる、計画の基礎であり出発点である経済状態の客観的トレンドの認識・観察にもとづいて計画を予測する手法＝発生論的方法と、計画主体の意思にもとづいて、目的・計画をたてる手法＝目的論的方法とが、鋭く対立した。この対抗は、目的論的立場からの重化学工業化の積極的推進派による勝利に結果した。

1927年前半になると、ソヴィエト政権を取り巻く国際環境が一変することになる。中国大陸においては蒋介石による共産主義者との合作破棄、資本主義国のなかでいち早くソ連邦を外交的に承認していた英国との国交断絶と、「平和共存」路線は消失し、緊迫した事態が続く。いよいよあらゆる点で「ひとりぼっち」となってしまった。こうして東のアジア、西のヨーロッパに挟撃される危機感・「戦争の危機」に対応するために、対外軍事力の即時強化に見合う工業化が必至となる。ここに、統制数字は、あの Gosplan の目的論者ですら躊躇する、いっそう急速にして高い数字へと引き上げられていく。

1927年末、第15回党大会において、いよいよ正式に国民経済の5ヵ年計画作成が、党の指令として決定され、計画化にもとづく急進的な重化学工業最優先の工業化路線が確定する。ここから、この急テンポの工業化を支える蓄積源の、安定的にして恒常的な確保が急務となる。

この年の秋以降、穀物価格の低下と工業品不足・高価格に由来する、農民の穀物供出量減少という、穀物調達危機、それによる都市の食料不足が深刻化し、高テンポの工業化の要請と鋭く衝突することとなる。この危機からの脱出策として、ソヴィエト政権は、工業化のテンポの切り下げ、あるいは調達価格の大幅な引き上げというネップ的方式を断念し、余剰穀物を農民から強制的・行政的方式による調達を、いわば「非常措置」として遂行した。さらにこの穀物調達危機の原因を、帝政ロシア以来の三圃制ならびにロシア革命によって地主から解放こそはされたが、依然として分散した小農民経営にもとづく農業構造に求め、このような危機からの根本的脱出策として、この農業構造そのものを、大規模に改造することが提起される。こうして、労働手段の機械化、ようやく木製から鉄製になった鋤（すき）の、トラクターへの置換、農業の集団経営・コルホーズ、つまりは農業の工業化と社会的経営が打ち出されることになった。そして、その創出方式は、農民自身による自発性とソヴィエト政権の農民への説得と援助ではなく、急速な工業化に対応しうる「ウラル・シベリア方式」とよばれる非常措置の広汎な適用・制度化による、「上からの全面的・強制的集団化<sup>10)</sup>」であった。この非常措置の体制化を通じて、蓄積源の安定的・恒常的確保をはかり、軍事力の基礎たる生産力としての重化学工業化の急速な建設が、計画化という行政的・動員方式の形で遂行されていくこととなった。ここに第一次5ヵ年計画と集団化への道が定まった。

こうして、ロシアにおける工業化という歴史発展の方向が、20世紀初頭のソヴィエトにおいて、計画化という形の「社会主義的工業化」という歴史上初めての形で展開されていくこととなった。だが、その具体的な形は、一国社会主義、そして上からの強力的な創出となった。ここから、20世紀において歴史的に実在することとなった社会主義なるものは、計画的工業化（重化学工業化）、一国、そして中央指令型、という、特殊ソヴィエト・後進ロシアおよび20世紀的要因という、歴史・具体的規定性をうけとることになる。

このような生産様式の大転換に触発され、いやそれを生活全体の革命へと牽引していく芸術運動が生起する。1920年代ソヴィエトでは、ロシア革命に触発された若き芸術家たちによる表現革命が一斉に開花する。それはのちにロシア・アヴァンギャルドと称されることになる芸術家群の総称であるが、彼らは、都市と農村との対立を止揚し、人間の自由時間の拡大と、その自由時間を文化・芸術的営みにあてようとしたのであった。まさに藤岡が未来社会論として展望している構想は、実は1920-30年代に「社会主義経済の基礎工事」において生産様式の転換だけでなく、生活様式の転換として、いわば車の両輪として試みられたのであった。以下、立ち入ってみていくこととする。

### Ⅲ ロシア・アヴァンギャルドによる芸術革命——「生活の芸術化」の20世紀・ソヴィエト的展開——

この運動の端緒もやはり第一次世界大戦まで立ち返る。1914年、第一次世界大戦勃発を契機に、芸術の都パリやベルリンからロシア人芸術家たちが一斉に帰国したことに始まる。

1917年ロシア革命を経て、芸術の自律性と国家による芸術支援を保障するナルコムプロス（教育人民委員会）、その付属機関イゾ（教育人民委員会造形美術局）、さらにイゾ付属機関としてインフ

ク（芸術文化研究所）が設立され、初代所長には20世紀絵画を代表する、かのワシーリー・カンディンスキーが就任したのである。このように文化・芸術を国家組織のなかに位置づける機構が出来上がると、今度は芸術家養成機関が設立される。それはヴフテマス（国立高等芸術・技術工房）といわれ、建築運動として有名なドイツ・バウハウスの教育システムと共鳴し合うカリキュラムを有し、基礎部門とこれを修了したものが進学する学部から構成されている。その教育理念は、特権階級が担ってきた文化・芸術を、ひろくプロレタリアートに解放すること、誰もが文化・芸術の担い手となれるというものであった。そして旧ブルジョワ的な表現様式ではなく、新しい芸術の創造が追求されていくことになる。

ところが1921年、ネップが導入され、富める者（ネップマン）と貧しい者という階級が再発生し、「旧い生活」・ブルジョアの生活が復活するかのような風潮が生まれてきた。これに対して強烈な危機意識をもった芸術家集団が、「新しい生活様式」の理論と創造、つまり政治革命を牽引する芸術革命の理論と実践を担う集団を結成する。これがレフ（芸術左翼戦線）と呼ばれる集団である。

1922年12月、レフが結成され、1923年3月から雑誌『レフ』を創刊する。ネップを契機に「ブルジョワ的・貴族的」階級文化が復興、あるいは残存しているゆえに、これと対抗し、芸術の革命を試みようとする。25年の廃刊まで7号が発行され、「綱領・実践・理論・書評・活動報告」が掲載された。この芸術家集団の特徴がよく表現されている、レフ結成の宣言文、いわば「生活芸術宣言」を引用しておこう。

「レフはわれわれの芸術の技術的な質をもっとも高度なものにして、われわれの理論が有効性をもった芸術であることを証明するであろう。レフは生活の芸術を建設するためにたたかうであろう<sup>11)</sup>」。

このようにレフは「生活の芸術の建設」理念を高く掲げたのである。では、どのように建設していこうというのか。ここでは、とくに藤岡の提起「大地（自然）への高次回帰、自由時間の拡大、自由時間のなかで生活の芸術化」がレフ自身によって、どのように認識され、また実践されていったのか、みていくこととする。

レフきっての理論家、ニコライ・チュジャークは次のように述べている。

「（明日という見地に立脚すれば—引用者）芸術は生活と融合し、芸術は生活に浸透するであろう。つまり、『労働』とみとめられている芸術であれ何であれ、芸術だけに携わることなどありえないし、ひとつに融合した生活から遊離した作品それ自体として専門的に作られた『芸術作品』もありえない。……芸術、それは万人の事業である。芸術は生活の『真っ只中』にある。芸術は多様で音楽的な韻律のように、生活に浸透する。芸術の韻律と労働のリズムは一体である<sup>12)</sup>」。

みられるように、未来社会では、芸術と生活が「融合」し、芸術が生活に「浸透」していき、「芸術は万人の事業」となって、芸術の韻律と労働のリズムは「一体」と化すると展望されるのである。つまり、藤岡がマルクスとエンゲルスから展望した未来社会、分業の廃止・人間の全面発達が展望されているのである。しかし、そこには藤岡が展望する「自然への高次回帰」はない。レフの中心メンバーで、とくに建築の専門家コルネリー・ゼリンスキーは次のように述べる。

「（コンクリートや鉄という正確な計算や理論を用いて使用される新しい素材が、従来の建築を変えてしまった今日—引用者）今日の人々がはるかに親近感をもつのは、ラスキン・フォード的な理想、つま



り砂のまかれた小径にはさまれた緑の中に立つ、快適でおなじようなコテージといった理想、主人のためにまじめに働く乳腺をもつ自己所有の雌牛といったつつましい理想よりも、公共図書館、スポーツ・ジム、食堂、図書館、学校、劇場、集合住宅<sup>13)</sup>である」

このように、ゼリンスキーに代表されるロシア・アヴァンギャルドが構想する「新しい生活様式」は、ラスキン・モリスの時代のような「自己所有のコテージ」ではなく、「公共図書館、スポーツ・ジム、食堂、図書館、学校、劇場、集合住宅」という「公共空間」が、「コンクリートや鉄という新しい素材」で建設されることであった。ここでの論点は、生活と芸術との融合、あるいは「生活の芸術化」が実現される物質的な土台がいかなるものかということである。

ロシア・アヴァンギャルドの未来社会のイメージは、ウラジーミル・タトリンの第三国際ナショナル記念塔模型<sup>14)</sup>に集約される。その斬新な表現は、いままロシア・アヴァンギャルドの象徴と見なされている。実は、このタトリンの記念塔は、冒頭で紹介した『共産主義の理念』（2010）英語版の表紙に使用されているのである（但し、翻訳された表紙には掲載されていない。大変残念である）。この『共産主義の理念』の執筆者の一人、スーザン・バック・モースは、ロシア・アヴァンギャルド研究者として、つとに知られている。次に、彼女が、20世紀のソヴィエトから21世紀へ、どのように未来社会を展望しているか見ていこう。

#### IV アメリカにおける展開——ニューヨーク近代美術館設立からエコトピアまで——

バック・モースの見解は、社会主義の20世紀から21世紀を考える上でも、また藤岡論文を検討する上でも、極めて示唆的である。バック・モースの著書、『夢の世界とカタストロフィー—東西における大衆ユートピアの消滅—』は、1990年前後に、モスクワにおいてソヴィエトの研究者と西側の研究者、ユルゲン・ハバース、ジャック・デリダ、フレデリック・ジェイムソン、スラヴォイ・ジジエラとの共同研究の成果である。その「序文」の冒頭、次のように総括的に述べている。

「大衆ユートピアの建設は、20世紀の夢だった。それは、資本主義と社会主義の両方にとっての産業的近代化のイデオロギー上の推進力だった。……しかし、産業的近代化がもたらす大衆民主主義の神話—産業を通しての世界の再編成は、大衆に物質的幸福を提供することによってより良い社会をもたらすことができるという信念—は、ヨーロッパ社会主義の解体、資本主義再構築の要求、そしてもっとも根本的なエコロジーの制約によって重大な挑戦をうけてきた。……本書は、大衆の夢の世界が消滅せんとするときに、その夢の世界をなんとかしようとする試みである。その出発点は冷戦の終結である。……それは真の意味において、20世紀の終焉を刻印した。……本書の各章は、冷戦での西側の勝利、社会主義にたいする資本主義の歴史的な凱歌という頻繁に繰り返されている物語に抗して、社会主義の歴史的実験が西側の近代化に伝統にあまりにも深く根づいていたために、その敗北は西側の物語全体を疑問視せざるをえなくなる、と主張している。……本書は、対立していた政治体制それぞれの内部での20世紀における文化発展を、共通のテーマのヴァリエーションにすぎないものとして、すなわち産業的近代化は大衆に幸福をもたらすことができるし、もたらさざらうというユートピアの夢として、解釈している。この夢は繰り返し

悪夢に転換して、戦争、開発、独裁、テクノロジーによる破壊の破局を招いた。エコロジーの危機に無感覚なまま、同じ夢を未来も持ち続けることは、自殺行為にほかならないだろう。しかしながら、これらの破局の結果は、その夢を拒否することによってではなく、その夢が表現している民主主義とユートピア的な希望の名において批判されるべきである<sup>15)</sup>。]

ここでは、さまざまな論点が提起されているが、筆者なりに整理しておこう。

まず、20世紀という歴史的段階規定である。その基礎に「産業的近代化」という生産力、具体的には重化学工業が据えられている。その基礎上で、西側の資本主義も、そして東側も「社会主義の歴史の実験」という形で、生産関係こそ異なるが、同じように展開してきたと位置づけられる。その内容は、「大衆に物質的幸福」をもたらすことができるという「大衆民主主義」である。一言にして「大衆ユートピア」と規定する。ところが20世紀末、冷戦体制の終焉という形で、重化学工業に基づく「大衆ユートピア」は終わりを迎えることになる。その決定的要因は、「エコロジーの制約」である。では、「大衆ユートピア」という「夢」は終わったのか。「エコロジーの危機」を自覚することで、「民主主義とユートピア的な希望」は、21世紀に引き継ぐべきだと展望を見出しているのである。まさに社会主義理念の、20世紀から21世紀への具体的展開を、産業化の基礎上で「エコロジーと文化的発展」の相互関係から、的確に見通しているといってよい。こうした問題設定は、藤岡の提起と交差するものがあるといってよいであろう。

では、あらためてバック・モース言うところの「大衆ユートピアの建設は、20世紀の夢だった。それは、資本主義と社会主義の両方にとっての産業的近代化のイデオロギー上の推進力」という事態を、彼女の著作のなかから探っていこう。

実は、先に見たソヴィエト第一次5ヵ年計画とアメリカ資本主義は、相互に交差していると言うのである。第一次5ヵ年計画のスタートにあたって、ソヴィエトの技術者たちがアメリカ自動車産業の本拠地デトロイトのアルバート・カーン株式会社を訪問する。この会社は、アメリカ3大自動車産業、ヘンリー・フォードやゼネラル・モーターズ、クライスラーの主要工場を建設した産業施設建設会社である。ソヴィエト側は、5ヵ年計画の概要を示し、工場プラントを注文する。あのソヴィエト新社会建設の象徴的都市マグニトゴルスクでさえ、アメリカで作成された設計図によって建設されていたのである。つまりアメリカの重化学工業をソヴィエト移植する、テクノロジー移転だったのである。1929年から32年の設計やレイアウトはアメリカ製、設備のほぼ半分はドイツ製であった。このような「テクノロジー移転」に対する支払いは外貨であり、ソヴィエト政権は、この外貨獲得のために所蔵する美術品を海外、とくにアメリカに売却していた。エルミタージュ美術館所属の絵画は、アメリカ財務長官アンドリュー・メロンによれば、「1930年代のソヴィエトの対外輸出公式総額のほぼ3分の1」に相当した。一言でいえばソヴィエトはアメリカ重化学工業の移植を通じて5ヵ年計画を推進し社会主義建設を進める一方で、アメリカはこれまでの重化学工業の基礎上で、「エルミタージュ美術館の絵画は、ワシントン国立美術館の開館によって、『国有化された』財産」となり、こうしたヨーロッパ・ロシア文化の直輸入の形で、20世紀の芸術世界を牽引していく、その原型を形成していくことになった。

象徴的な例を、バック・モースは、次のように述べている。

「ピッツバーグの製鉄工場です。まず財産をつくったメロンは、売却されてマグニトゴルスクの製鉄工場の建設を可能にした油絵に自らの資産を費やした。このようにして、資本主義の利潤(ア

メロニカ労働者の賃金から除かれた剰余価値）は、（メロン家の財産を経由して）先進テクノロジーをもった社会主義工場の建設、つまりソヴィエト労働力の価値を今度は増加させることになる。マルクスが「固定資本」と名づけたものの増加に（マッキー建設会社という資本主義企業を経由して）資金を供給することになったのである。一方、それとまったく反対の方向になるが、ロシアの貴族がかつて所有し、ポリシェヴィキが国有化した文化的な『財宝』は（メロンの課税回避の『慈善的な』仮面を経由して）米国政府の財産となり、アメリカ国民は国立美術館という形で社会化された文化を手に入れたのである。正反対のものとされる2つの体制のこの奇妙な融合について、どのように考えるべきなのだろう。ラファエロの絵画ひとつの売却（170万ドル）が、マグニトゴルスクの設計（250万金ルーブル）の半分以上をまかない、それが数万人のソヴィエト労働者の仕事、数百万トンの鉄鋼製品の生産（1938年までに）<sup>16)</sup> 移転するとき、何が適正な会計なのだろうか。

ここで指摘されている「正反対のものとされる2つの体制のこの奇妙な融合」という表現はまことに的確で、とくにアメリカをも視野に入れた具体的な分析が求められるところである。ここでは、その一作業として、以下、輸入された美術品がアメリカで、どのように芸術世界の形成していくことになるのか、具体的にみていくことにしよう。

美術品が輸入されてきたとすれば、今度はそれを所蔵する「器」、つまり美術館が必要となろう。その美術館が、1929年、大恐慌直前のニューヨークにオープンした、アメリカ初の本格的近代美術館、ニューヨーク近代美術館（MoMA）である。その創設者アルフレッド・バー・ジュニアは、その準備のため、ヨーロッパ、ソヴィエトを訪問し、美術館、芸術家、美術教育機関の関係者から精力的にヒアリングを重ねる。ロンドンを経て大陸入りした彼は、ドイツ・バウハウス（デッサウ時代）を訪問し、バウハウス創設者のヴァルター・グロピウスをはじめ、パウル・クレーラに会う。そしてついにソヴィエト入りし、あのレフのメンバーとも面会するのである。やがてバー・ジュニアは、20世紀芸術のあるべき方向への確かな手ごたえを得て帰国し、ニューヨーク近代美術館設立へとむかうのである。<sup>17)</sup>

ところが、アメリカに移植されたヨーロッパ文化・芸術は、1930年代、重化学工業の発展のなかで、「インダストリアル・デザイン」として定着し、リ・モデル（機械本体に変更はなく、表面のデザイン、うわべだけの変化）に利用されるようになり、やがて大量生産・消費・廃棄のアメリカ的生活様式を助長する手段と化する。<sup>18)</sup>

この大量生産・消費・廃棄のアメリカ的生活様式への自己批判・抵抗が、1970年代、アメリカ内部から、とくに西海岸、カリフォルニアから「カウンター・カルチャー」として展開していく。これが、地球環境問題と結びつき、新しい生活様式、持続可能な社会創造の運動へと展開するのである。この運動の担い手の多くは、ヒッピーにその起源を有する。アメリカ的生活様式の象徴である自動車を否定し、自分の足か、もしくは足をエンジンとする自転車を愛用している。そのバイブルとされている本が『ナウトピア』である。「ユートピア」ではなく、「今、そこにある」という意味の「ナウトピア」、新しい日常生活のなかで新しい生活様式と未来社会を実現していくのである。

そもそも『ナウトピア』というタイトルは、19世紀イギリスのウィリアム・モリスの『ユートピア便り』の現代版を意図している。<sup>20)</sup> 自転車の廃材部品を利用したアートで、ガーデニングの周辺を飾り、自転車レースをアジアやヨーロッパで開催することで、環境と芸術の一体化運動を世

界各地に伝えている。つまり「生活の芸術化」の21世紀版なのである。19世紀産業革命期におけるモリスの構想は、20世紀初頭、ソヴィエトでは社会主義建設のなかで、アメリカでは20世紀後半からの環境問題を媒介に、アメリカ的生活様式を乗り越える運動として、展開され、いまや21世紀、新しい社会構想のなか新たな展開を遂げようとしているのである。

## V オキュパイ・ウォールストリート運動が提起する生活革命——21世紀展開のはじまり——

このような運動は、劈頭で述べた2008年の世界経済危機のなかで、飛躍を迎えている。

米誌『タイム』は2011年12月、恒例の年末特集号で「今年の人（パーソン・オブ・ザ・イヤー）」に、アラブから全世界に広がった「抗議する人（プロテスター）」を選んだ。『タイム』は、チュニジア、エジプトと続いた「アラブの春」が、秋になるとアメリカの「オキュパイ・ウォールストリート（ウォール街を占拠せよ）」へと展開し、2011年は「抗議のネットワーク」が地球上に張り巡らされたと分析した。<sup>21)</sup>

「アラブの春、ヨーロッパの憤りの夏、ウォールストリート占拠の秋、モスクワの冬」と呼ばれるように、四季にあわせて、抗議のうねりは地球を一周した。2010年12月17日、チュニジアの若者が警察のたかりに抗議して自死したことをきっかけに、2011年に入ると、若者の憤りは、ツイッターやフェイス・ブック、ユー・チューブといったソーシャル・メディアを通じて、一気にアラブ世界へと広がり、独裁政権を次々に崩壊させていった。エジプトでは、カイロのタハリール広場に若者が溢れかえり、テントを張り、抗議し続けた。こうした政治腐敗と経済格差に憤る若者の行動は、スペインの「5月15日運動」へと展開する。

スペインは、2008年の住宅バブルの崩壊を契機に経済が一気に悪化し、失業率は2割、特に若者に至っては4割を超した。「われわれは政治家と銀行家が扱う商品ではない」と、5月15日にマドリードのプエルタ・デル・ソル広場に数万人の若者が集まり、居座り続けた。「家がない、仕事がない、年金がない、そして恐れもない」という「憤り」が抗議の引き金であったことから、これをメディアが「インディグナドス（怒れる人たち）」と表現し、「5月15日運動」と呼んだことから、その呼び名が定着していった。そして共感は広がり、スペイン全土で600万人以上が参加したのである。

こうした「未来なき若者運動」の特徴は、民主主義を再生させる原点として古代ギリシアのアゴラ（広場）に注目し、このアゴラを、プエルタ・デル・ソル広場で実現させようと試みたことにある。さらにインターネットを駆使して、サイバー上で「国際会議」も開催した。いわばアゴラのネット版、グローバル民主主義、の試みである。こうして、ヨーロッパ・スペインでの試みが、アメリカへ伝播していくのである。では、この「オキュパイ・ウォールストリート」はどのように展開していったのだろうか。

この「オキュパイ・ウォールストリート」運動には指導者がいないといわれているが、「呼びかけ人」は存在している。2011年7月13日 カナダ・バンクーバーに本拠を置くラディカルな反消費主義雑誌『アドバスターズ（商業広告と闘う人々という意味）』が、ブログ上で、世界金融危機を引き起こした元凶、ニューヨーク証券取引所があるウォール街から「富とパワー」を取り戻そ

うと行動提起を呼びかけたことが発端である。

それは極めて具体的な呼びかけであった。「カイロのタハリール広場をウォール街に再現する準備はできているかい？ 9月17日、ロイアー・マンハッタンに集まろう。テントを張って、炊き出しをして、平和的にバリケードを築こう。そしてウォール街を占拠しよう」というものである。その特徴はデモのような一時的なものではなく、テンティング (tenting: テントを張って野営する) という占拠方式にある。「呼びかけ人」である『アドバスターズ』の発行者、カレ・ラーセン本人は、運動の「初日から私の手を離れた」、占拠という直接民主主義の発案も「私じゃない。ウォール街よりもスペインの若者たちがやってきたこと」と自己限定している<sup>22)</sup>。この発言から、スペインの「5月15日運動」・「未来なき若者運動」とのつながりが確認できよう。

では、7月13日の呼びかけは、どのように9月の占拠へと具体化していったのか。

8月2日、ネット上の呼びかけに応じた人々が、ニューヨーク証券取引所至近の「雄牛像」が据えられているボーリング・グリーン公園に集まり、企画会議を開いた。ここで、スローガンは「我々が99%」、「ウォール街を占拠せよ」、占拠方式は、全員参加で意思決定するゼネラル・アセンブリー（総会）と決まる。ちなみに、ポスターは、最初の呼びかけ時から掲示されており、そのデザインは、女性ダンサーが、怒り猛る「雄牛像」の上で、颯爽と踊るものである。まるで株値を吊り上げるウォール街を象徴する「雄牛像」を、若い女性が軽やかに制御するかのようである。

そして、いよいよ9月17日の当日を迎える。ズコッティ公園には、なんと2000人がテントを持参し、集まって来たのである。ここは、ワールド・トレード・センター跡地の南東、すぐ隣にはイサム・ノグチの「レッド・キューブ」像があり、テニス・コート10面ほどの小さな公園、リバティ公園とも呼ばれている。集まった人々は、自主的にいくつかの仕事を分担するワーキンググループ（具体的にはメディア班、食糧班、清掃班、アート班などが存在する）が活動し、広場のなかで新しい日常生活が持続していく。

発信メディアの中心はインターネットだが、紙媒体も存在している。とうとう経済紙『ウォール・ストリート・ジャーナル』をもじって、『オキュパイド・ウォール・ストリート・ジャーナル（占拠されたウォール・ストリート・ジャーナル）』と、新聞まで「占拠」した形で、無料発行されている。紙上の「いま、あなたにできること」欄には占拠や自主学習の仕方を伝えたり、応援に駆けつけた著名人の発言も掲載されている。例えば、大きな反響を呼んだ、カナダ在住のジャーナリスト、『ショック・ドクトリン』の著者、ナオミ・クラインの応援演説「世界で今いちばん重要なこと」も掲載されている<sup>23)</sup>。なにより象徴的な記事は、この運動そのもの、つまり、この運動は「要求のない運動」と称されている点、に関わるもので、「要求項目はない。我々はお互いに話し合い、そして聴いている。この占拠は、なにより参加することにあるのだ」と宣言していることである。さらに全米各地の「オキュパイ」運動のポスターも紹介している。

このように見てみると、「オキュパイ・ウォールストリート」運動は、しばしば「反格差抗議運動」が強調されて報道されているが、今回の運動の新しさと特徴は、次の点に存するというべきである。すなわち、意思決定は、ゼネラル・アセンブリー（直接民主主義による合意形成）方式、労働様式は、自主的なワーキンググループ（自発的労働）方式、一言にして、直接民主主義という原理に基づく、新しい日常生活の創出、いわば生活革命の試み、といってよい。広場という視

点から見れば、都市公共空間を占拠する都市革命の試みといってよい。

他方で、この運動はしばしば「指導者不在」と言われているが、しかし「カタリスト（触媒者）」という新しい役割を担う人々が存在し、その点も、今回の運動の大きな特徴である。今回は次の4人である。まず占拠を呼びかけた『アドバスターズ』発行人のカレ・ラースン。ロンドン在住の気鋭の文化人類学者で、「我々が99%」、「ウォール街を占拠せよ」のスローガンとゼネラル・アセンブリー方式の生みの親であるデイヴィッド・グレーバー。ニューヨーク在住の活動家の2人、ヨータン・マーロンとカイリー・デドリック<sup>24)</sup>。

ちなみに、こうした直接民主主義方式の活動が知られるようになったのは、1999年、シアトルで開催された世界貿易機関（WTO）閣僚会議に反対する「シアトルの闘い」を通してであった。「One No, Many Yeses」, 「新自由主義だけは拒否、あとは担い手も行動スタイルもすべて“多様性”を承認」というもので、この「闘い」の方式は、21世紀に入ると、世界各地で試みられるようになってきている。

占拠されたズコッティ公園では、どのような営みがおこなわれていたのか。先述したように、自主的にいくつかの仕事を分担するワーキンググループ、具体的にはメディア班、食糧班、清掃班などが存在している。その内容を見てみよう。とくにアート班の役割は注目に値する。

「食糧、衛生、メディア、集会の円滑な運営、支持者からの支援物資の受け取りといった現実的問題はワーキンググループが担当した。他のグループは課題を議論したり、アート・文化を創造したり、戦術について論じたり、そして要求を発表するかどうかを検討したりする。……占拠地は単に新しい社会について話すだけの場ではない。平等主義的生活を1日24時間実践する実験の場となった。……コミュニティ形成という経験は容易に忘れられることはないし、徹頭徹尾包摂的で、尊厳に溢れ、協力的で、そして水平的な、そういう新しい文化の創造活動への切望を深める。」<sup>25)</sup>

つまり、ゼネラル・アセンブリーとワーキンググループに象徴される「オキュパイ」運動は、「政治と民主主義の再規定を求める運動」であり、この運動におけるアートの役割は「あるべき未来の文化」を創造し、ゼネラル・アセンブリーを牽引すること<sup>26)</sup>なのである。したがって、ゼネラル・アセンブリーを活性化する活動、それがアートというわけである。このワーキンググループは、正式には「アート・アンド・カルチャー・ワーキンググループ」といい、ズコッティ公園はもちろんのこと、ニューヨークのラディカルな本屋であり、たまり場であるフェミニズム関連の書籍が充実している、その名も「ブルーストッキング」書店でも活動しており、そこにもオキュパイ芸術が飾られている。

こうして「オキュパイ」運動は、ニューヨークからあつという間に全米に展開していった。その様子は、先述した『オキュパイド・ウォール・ストリート・ジャーナル』紙上で、生き生きと紹介されている。まず印象的なのは、『オキュパイド・ウォール・ストリート』の題字そのものである。「オキュパイド」を強調した構成、しかもまるでロシア・アヴァンギャルドを代表し、『レフ』の表紙をデザインした、アレクサンドル・ロドチェンコを想起させるものなのである。紙上には、各地の「オキュパイ運動」のポスターも紹介されている。例えば、「オキュパイ・オースティン」。これも1920年代のロシア・アヴァンギャルドが創作したポスターを彷彿とさせるものである。

また「オキュパイ・サンフランシスコ」のポスターも同様である。「オキュパイ・サンフランシスコ」ではデモも行われ、筆者も参加した。参加者は、数千人に膨れ上がり、仮装しダンスを踊る若者、乳母車を引く若い母親、太鼓を叩く子どもたち、全裸の男性、「ボクも99%とともに」のゼッケンをつけた犬。肌の色もさまざまで、多くは自発的な老若男女の個人。多くの若者が仮面を被っていた。この「オキュパイ」運動では、しばしば仮面が登場する。これは16世紀イングランドの英雄、ガイ・フォークスが被っていたといわれる仮面で、いまや「オキュパイ」運動やインターネットのハッカーたちの象徴であり、「抵抗と匿名の国際的シンボル」とされている。カリフォルニアの青空の下、ひとときわ鮮やかな集団を見つけた。それは「アーティストの99%は、人種差別・強欲資本主義に反対」と垂れ幕を持って、サンフランシスコを闊歩していた若者たちであった。まるで資本主義に対抗するカーニバルであり、1920年代、かのソヴィエト、ロシア・アヴァンギャルドの路上祝祭を彷彿とさせるものであった。

### おわりに

このように見てくると、藤岡構想は、すでに「はじまりつつある」と言ってよいであろう。

構想の具体化を考えるうえでも、本稿で少しばかり触れてきたように、19世紀のマルクスやモリスの構想、そして20世紀におけるソヴィエトやアメリカでの具体化の試みや、さまざまな社会・芸術運動、さらには21世紀初頭における新たな動き、こうしたものの歴史的・理論的な分析、そしてその位置づけが求められてこよう。レーニンの表現で言えば、「始めからやりなおす」ということになるのであろう。藤岡論文は、こうした点から、極めて示唆に富むものであったと言ってよいであろう。

### 追記

本稿は、経済理論学会第59回大会（2011年9月17日、立教大学）の「社会主義と労働」分科会における藤岡惇報告「ソ連型社会とは何であったのか―大地・生産手段への高次回帰、自由時間拡大を指標に考える―」への筆者のコメントを骨子としている。

### 注

- 1) 「特集にあたって」、『経済科学通信』No.125, 2011年4月, 16頁。
- 2) Douzinas, Costas and Zizek, Slavoj, [2010], pp. vii - viii (9-10頁)。
- 3) 藤岡惇 [2011], 29-30頁。
- 4) — [2011], 32頁。
- 5) — [2011], 32頁。藤岡が「資本の原始的蓄積」と概念規定した「産業化・都市化」、いわゆるスターリンによる「工業化」については、筆者は、ブレオブラジェンスキーの「社会主義的原始的蓄積法則」概念を通して検討している（後藤宣代 [2000]）。そこでは、『資本論』で提起された資本主義に関する諸概念が、当時の理論家たちによって、将来社会への過渡期にいかんかに発展、あるいは消滅させられていくことになるのか、詳しく分析している。
- 6) スラヴォイ・ジジエク [2001]。
- 7) В. И. Ленин, Заметки публициста -О восхождении на высокие горы, о вреде уныния, о пользе

- торговли, об отношении к меньшевикам и т.п., 《Полн. собр. соч.》 т. 44, 1982, стр. 415-418, 「政論家の覚え書—高い山へのぼることについて, 意気消沈の害について, 商業の利益について, メンシェヴィキにたいする態度等々について—」, 『レーニン全集』第33巻, 大月書店, 1959年, 201-204頁。ここで一番重要な言葉, 「社会主義経済の基礎工事」の原語は, фундамент социалистической экономики, 「始めからやりなおす」の原語は, начинание сначала, である。
- 8) Erlich, Alexander, [1960]。本書は, 工業化論争を知る上で最適の文献である。
- 9) В. И. Ленин, О 〈Левом〉 ребячестве и о мелкобуржуазности, 《Полн. собр. соч.》 т. 36, 1981, стр. 300, 「『左翼的』な児戯と小ブルジョワ性について」, 『レーニン全集』第27巻, 大月書店, 1958年, 343頁。
- 10) 溪内謙 [2003]。スターリン政治体制研究の第一人者による最晩年の珠玉の論考は, この時代の研究方法について, 次のように示唆に富む論点を提起している。①ソ連邦解体とアーカイブへのアクセスと主要統計数値の開示によって明らかにされた1920-30年代は, 「以前考えられたよりもはるかに複雑であり多くの動的要因を宿していたことが理解される」とし, 「画一化された社会ではなく, 指導部は下からの圧力に応えなければならなかった」, 「動的過程」であると, 繰り返し, 繰り返し「動的要因」および「動的過程」を強調する(同160頁)。②この時代が, 強制的集団化や大粛清などの暗黒時代を連想させる出来事の連鎖である一方, 他方, ロシアが遅れた農民国から近代的工業国に向けて急速に変貌した時代でもあったと説く。そして, これらの「しばしば矛盾・対立する諸側面の相互関連を追及して全体像を構築することはその大部分が今後の学問的課題である。罪状告発的にスターリン時代を論じることだけでは, 現代史は大きな空白を残す」(同160頁)と全体像の構築を呼びかける。③「ウラル・シベリア方式」という「新しい穀物調達方法」の長年にわたる研究に裏打ちされて, 「しかし大切なことは, この方法の形成が個人の役割に還元されえない, さまざまな主観的・客観的あるいは歴史的・状況的要因の相互作用の結果であるという, 機序の複合性である」(同 159頁)と, その歴史的要因の複合性を強調している。方法論的に言えば, 歴史的要因の具体的なものの具体的分析, そしてその総合化, ということになる。なお溪内は早くも1988年, 21世紀の社会主義を構想するうえで, 次のような示唆に富む提言もしている。「現代社会主義の思想的課題は, 『社会から国家へ』の再転換, 『国家から社会へ』にある。しかし, それをいかに具体化するかはなお模索の段階にある。この状況は, 核, 資源, 環境等の地球大争点をめぐって, 国家を超えるものが社会運動のレベルで探求されている西側の状況と重なり合いながら, 『国家の時代』から『国家の危機の時代』への世界史的転換を告げている」(溪内 [1988] 90-91頁)。さらに20世紀から21世紀への展望には, 「西も東も『20世紀的なるもの』の危機という共通の問題状況に直面しているのであり, 『未来への構想』も, この共通項の確認から出発しない限り, 実りあるものとはなりえないであろう。社会主義の意味への問いも, 社会主義が, 現代社会主義体制もその一部を成している世界史的危機に対する建設的批判の思想たりえるかという規範的な問いかけでなければならない」(溪内 [1988] 237頁)と結んでいる。社会主義とは, 世界史の構想力に他ならないのである。
- 11) 「なんのためにレフはたたかうか?」『ロシア・アヴァンギャルド・第7巻: 芸術左翼戦線』[1990], 76頁。ロシア・アヴァンギャルド研究史については, 従来は欧米中心であった研究も, ソ連邦崩壊後, 本国で進展し, 新しい資料も発掘され, 研究が深まってきている。その成果は, 『ロシア・アヴァンギャルド小百科』(タチヤナ・コトヴィチ, 2003)が邦訳(桑野隆監訳, 水声社, 2008年)されている。日本での研究も新しい局面を迎えている。但し, 本稿では言及しない。
- 12) 同上書, 83頁。
- 13) 同上書, 455頁。
- 14) タトリンの第三インターナショナル記念塔は, 日本の文化・芸術は勿論のこと, 社会科学にも深い影響を与えている。とくに講座派の代表, 山田盛太郎『日本資本主義分析』(1934年)の章別構成と概念の表記方法に深い影響をあたえたという見解がある(寺出道雄「2008」)。
- 15) Buch-Morse, Susan [2000], ix - x iii (v - x 頁)。



- 16) *Ibid.*, p.172 (216-217頁)。
- 17) Marquis, Alice Goldfarb [1989]。本書は、ニューヨークの芸術がいかに1920年代のヨーロッパ、とくにドイツ・バウハウスやロシア・アヴァンギャルドと結びついているか、MoMAの創設者、アルフレッド・バー・ジュニアの生涯を通じて、詳しく論じている。まさにバック・モースが指摘するように、「冷戦での西側の勝利、社会主義にたいする資本主義の歴史的な凱歌という頻繁に繰り返されている物語に抗して、社会主義の歴史的実験が西側の近代化に伝統にあまりにも深く根づいていたために、その敗北は西側の物語全体を疑問視せざるをえなくなる」ことを、文化・芸術の側面から照射するものになっている。
- 18) 柏木博 [1992]。
- 19) Daniels, Robert V [2006]。
- 20) Carlsson, Chris [2008]。
- 21) *Time*, December 26, 2011/January 2, 2012。
- 22) 『朝日新聞』(2012年1月1日付)。
- 23) *The Occupied Wall Street Journal*, Issue 2, October 8, 2011. なお、ナオミ・クラインの応援演説は、『世界』(2011年, 12月号)に日本語訳が掲載されている。
- 24) *Time*, October 31, 2011。
- 25) Gelder [2011], pp.7-9. (20-22頁, 但し, 翻訳は一部変えている)。
- 26) Writers for the 99% [2011]。

#### 参考文献

- 柏木博 [1992], 『デザインの世界』NHK ブックス。
- 後藤宣代 [1994], 「1920年代ソヴィエトの社会主義建設構想—世界経済と重化学工業化をめぐる政治経済学—」, 『1994年度土地制度史学秋季学術大会報告要旨』。
- [1999], 「機械の時代とロシア・アヴァンギャルド—『生活の芸術化』の20世紀的展開—」, 『文化経済学』第1巻第3号。
- [2000], 「プレオブラジェンスキー『社会主義的原始蓄積法則』の理論的意義—ソヴィエト社会主義の性格規定に寄せて—」, 『政経研究』No. 74。
- [2004], 「グローバリゼーションと文化・芸術—『生活の芸術化』の発展諸段階と21世紀への展望—」, 『経済科学通信』No. 105。
- [2012], 「地球を一周する若者の抗議運動—占拠運動にみる新しい社会モデル実践の試み—」, 『経済科学通信』No. 128。
- [2012], 「フクシマと『オキュパイ・ウォールストリート』運動—2011年世界各地の『憤り』のなかで位置づける—」, 『政経研究』No. 98。
- 溪内謙 [1962], 『ソヴィエト政治史—権力と農民』, 勁草書房 ([1989], 岩波書店所収)。
- [1970], 『スターリン政治体制の成立 第1部—農村における危機—』岩波書店。
- [1970], 同上『第2部—転換—』岩波書店。
- [1980], 同上『第3部—上からの革命 その1—』岩波書店。
- [1986], 同上『第4部—上からの革命 その2—』岩波書店。
- [1988], 『現代社会主義を考える』岩波新書。
- [1995], 『現代史を学ぶ』岩波新書。
- [2003], 「スターリン主義の起源に関する一考察」, 『思想』, 岩波書店。
- 寺出道雄 [2008], 『山田盛太郎—マルクス主義者の知られざる世界—』, 日本経済評論社。
- 藤岡惇 [2011], 「ソ連型社とは何であったのか? その本質は『国家産業主義』だった—大地・生産手段への高次回帰, 自由時間の拡大を指標に考える—」, 『経済科学通信』No. 125。
- 前川裕司他編 [2009], 『Мечты Русского авангарда 1917-1937 (ロシアの夢1917-1937)』, アートインプレ

- ッション。
- 『ロシア・アヴァンギャルド・全8巻』[1988-1995], 図書刊行会。
- Art into Life-Russian Constructivism 1914-1932-*, [1990], The Henry Art Gallery University of Washington。
- Bowlt, John E, ed., [1976], *Russian Art of the Avant Garde-Theory and Criticism 1902-1934-*, Rev. ed. 1988, Thames and Hudson (ジョン・E. ボウルト編, 川端他訳『ロシア・アヴァンギャルド芸術』岩波書店, 1988年)。
- Buch-Morse, Susan, [2000]. *Dreamworld and Catastrophe-The Passing of Mass Utopia is East and West-*, The MIT Press (スーザン・バック・モース著, 堀江則雄訳, 『夢の世界とカタストロフィー—東西における大衆ユートピアの消滅—』岩波書店, 2008年)。
- Carlsson, Chris [2008], *Nowtopia-How Pirate Programmers, Outlaw Bicyclists, and Vacant-Lot Gardeners Are Inventing the Future Today !-*, AK Press。
- Daniels, Robert V [2006], *The Fourth Revolution-Transformations in American Society from the Sixties to the Present-*, Routledge。
- Douzinas, Costas and Zizek, Slavoj, eds [2010]. *The Idea of Communism*, Verso. (コスタス・ドゥズィーナス, スラヴォイ・ジジェク編, 長原豊監訳『共産主義の理念』水声社, 2012年)。
- Erllich, Alexander, [1960]. *The Soviet Industrialization Debate 1924-1928*, Harvard University Press。
- Gelder, Sarah van, eds., [2011], *This Changes Every Thing : Occupy Wall Street and 99 % Movement*, Berrett-Koehler Publishers (サラ・ヴァン・ゲルダー, 「Yes Magazine」編集部編, 山形浩生, 守岡桜, 森本正史訳『99%の反乱—ウォール街占拠運動のとらえ方—』バジリコ, 2012年)。
- Gough, Maria, [2005]. *The Artist as Producer-Russian Constructivism in Revolution-*, University of California Press。
- Kotovitch, Tat' jana, [2003], *Entskilopedija Russkogo Avangarda*, (桑野隆監訳『ロシア・アヴァンギャルド小百科』, 水声社, 2008年)。
- Kantor, Sybil Gordon, [2002], *Alfred H. Barr Jr. and the Intellectual Origins of the Museum of Modern Art*, The MIT Press。
- Marquis, Alice Goldfarb, [1989], *Alfred H. Barr Jr.-Missionary for the Modern-*, Contemporary Books。
- Writers for the 99 % eds., [2011], *Occupying Wall Street : The Inside Story of an Action that Changed America*, OR Books (ライターズ・フォー・ザ・99%著, 芦原省一訳『ウォール街を占拠せよ—はじまりの物語—』大月書店, 2012年)。
- Zizek, Slavoj, [2001], *Repeating Lenin*, (スラヴォイ・ジジェク著, 長原豊訳『迫り来る革命—レーニンを繰り返す—』岩波書店, 2005年)。